人口問題研究所
研究資料第一八號　昭和廿三年四月

過剰人口論の史的展望 その二

―ロバート・メルサスの「過剰人口論」―

厚生省人口問題研究所

目次

解題 …… 本多技官

「リユーメリン」過剰人口論 …… 三國技官

附録 リユーメリンのマルサス批評 …… 本多技官

解題

一

リュードメリンの「過剰人口論」は十九世紀末葉から廿世紀初頭にかけてのドイツ学界における活潑な人口問題論議に最初の一石を投じた古典的文献の一つで、一八七九年の講演記録を八年数行の回顧的感想を結語としてつけ加えただけで発表されたものである。

二

リュードメリンがテュービンゲン大学の統計学教授として、また博識多才な学究として、特に人口問題に対する警世的論客として最も精力的に活躍した十九世紀七〇年代のドイツは、イギリスに遅れること凡そ百年にして漸く近代産業革命の洗礼をうけた新興國ドイツがこの近代革命に不可分な明瞭表裏せる社相を最も露骨に経験せざるをえなかった時代であり、特にまた近代社會の生成期に通有な人口膨張の高潮期でもあった。普佛戦争の光栄ある勝利はドイツに近代国家としての統一と戦勝による一時的な經済的好況をもたらしはしたが、しかし七〇年代の過半を蔽う産業沈滞の漫性的持續はそれだけに又一層ドイツの國民大衆を失業と窮乏の中に苦悩させた。それは嘗てマルクスの人口論を生んだ世紀初頭のイギリスの世相と同じい。そういう意味ではリュードメリンはマルサスと世紀を距てながらも同じ歴史的年代の中に立っていたともいってよいわけで、典型的な十九世紀的マルクス主義者の一人であったリュードメリンは、遺憾するところなくこの眼前諸般の社会悪の根源を過剰人口にありとし

そして帰趨をしらない当面各般の社会問題はこれを人口問題の立場から再認識することによってのみ全く新しい眼でこれを見なおすことができると考えた。七〇年代ドイツの慢性的不況が単に景気変動上の一波紋に過ぎずかつたことを、続いてこれを過剰人口に因由する恒常的な結果と考えたリューメリンの論題についてはその後の諸家の指摘するところであり、当時のドイツの異常な人口増加もその機械的の進歩を凌駕した人口問題論議の無実が過剰人口問題から逆に出生率の低下問題に一転したことは周知のことであるが、常にマルサスの人口論が近代人口問題論議の出発点となつたと全く意味で、リューメリンの過剰人口論は当時のドイツ学界に人口問題に対する関心を喚起するに役立つたのみならず、また其後の人口問題論議にとつての格好の出発点ともなつたことは決して偶然の符合ではない。

十九世紀末葉以降世紀初葉にわたる近代人口論議のドイツ的再興の中でリューメリンの占めているそのような地位性彼がマルサスと全く保守反動的な思想的立場を強く代表しているところにも亦うかがわれる。過剰人口は近代的自由を履きちがえた無智無学な労働者階級の軽率な結婚と無責任な出生とから生まれる。従つてそのような自制動の欠けた者の結婚の自由を制限するためには巨家的権力の行使も亦やむを得ないとまでリューメリンは主張しているのである。過剰人口の根源をその歴史社会的な諸条件の中によりは寧ろ人間生来の動物本能の中にみようとする理論的志向はそのような思想的立場と表裏相應じているわけで、リューメリンを典型的なマルサス主義者たらしめる最大の理由も亦まここにあるといえよう。

しかしながら、リユーメリンをマルサスと分かつ歴史的年代の隔りも亦無視し難い。リユーメリンはひらけゆく新時代の動向をはつきり、と、認識しており、近代的人口増加の根源である近代的自由解放の潮流を見逃してはいない。或いはその政治的立場が保守反動的であつたにせよ、かゝる新時代の動向を却つていよゝ切実に実感せざるを得なかつたのだともいえよう。いかえれば、過剰人口問題は、リユーメリンにとつては、何よりも先ず近代社会に特有な歴史的事実としてその関心を惹いたのである。それは今時に、マルサスの名に於いて、時代を超えた人間社会に宿命的な問題として表象されはしたが、併しマルサスの人口論に見られるような超歴史的な原則を前面に押し立てる自然主義的理論構成は彼の時代感覚の許容し得るところではなかつた。今理論の基礎となるべき過剰人口傾向は、リユーメリンにあつては、専ら統計的観察によつて実証せらるべき現存の事実として取り上げられている。其の後における出生率の恒常的な低下傾向の確認がマルサス人口論の当否を再吟味すべき根拠として早速取り上げられたのも此の点に実証的時代感覚に負うているといえよう。しかし出生率の低下傾向が必ずしも直ちにマルサス人口論の反駁論拠となるわけではないのと全様に、マルサス主義者リユーメリンの試みた統計的実証も必ずしも直ちにマルサスの人口原理を代位し得るわけのものではなかつたし、それは理論的構成の強さにおいては寧ろ一歩の後退とさえいうこともできようが、そのような実證的、或いは歴史的感覚の強化は自然主義的理論構

成に替わるべき新しい原則への要請を孕んでおり、問題観点の原則的な転換への一種の地ならし工事として時代の歴史的意味がある。「過剰人口論」と並んでリューメリンのもう一つの人口論策である「マルサス人口論」はあくまでマルサス説の全体的真実さを顕章するためにその統計学的及び経済学的部面における部分的な欠陥を修正し補足しようとしたものであるが、とりわけ社会的、または文化的な観点からする補足と修正を強調しており、自然生物学的な過剰増殖傾向は史上文化的な発展をとげてきた国民については常にその人口をその国民的収入の限度以内に抑えようとする予防対抗の傾向によって伴われていることを力説している。このような人口の自制的適応傾向をマルサス説に対する反対論拠として取りあげた者は後のウォルフであるが、リューメリンにとっては、この修正はなお決してマルサス説の否定を意味するものではなくて、飽くまでその補完であり補強であると考えられている。そこにわれわれは典型的なマルサス主義者リューメリンを見ると共に、また人口論における新しい理論的構成への胚種が育まれつつあることを観取するに不足しないそういう暗示と指向とは専ら時局を論じた「過剰人口論」においても之を覗うに決してこと欠かない。

四

人口問題の歴史社会的背景への反省の強化に伴い特に決定的な重要性をもってくるものは経済学的問題であるが、リューメリンの「過剰人口論」が従来諸家によって屢々引用される史献史的意義も亦主としてそこにあるようである。リューメリンは当面の吉相を過剰人口の

結果として論断するに当ってまず過剰人口なるものの本質を明らかにする必要ありとし、之を人口増加速度と国富または国民所得の増加速度の対比の問題としてとりあげた。過剰人口問題は明確に全国民経済的連関からとりあげられるべきであるとしてよいわけで、マルサス人口論が専ら人口と農業生産力との関係へ即ち人口対食物の関係一点として取り扱はれていたのに対比して問題観点の明確な発展を指摘しえよう。土地収穫逓減法則を確立してマルサス人口論に理論的基礎を與えたJ・S・ミルにおいても農業的理論の立場はなお超えていず、イギリス学界で過剰人口論を明確に全産業の生産力を対象として論じたものの始めが一八八八年のキャナンの『エレメンタリー。ポリティカル・エコノミー』であるとすると、リューメリンの態度は確かに本問題に先鞭を附したものといってよく、爾後の人口論争に決定的な論題分野を確定したものといってよいと思う。

しかしながら、過剰人口の本質を全国民経済的連関からとらえることは国民経済の運営に不可分な国民人口の社会階級別構成とその変化とそれにしてはなし難いやそして人口論における自然主義的伝承からの解放と恐らくそのような厳密社会的構造法則への反省を媒介してのみ始めて実現される相違ないが、それはその後の人口現象の劇的な変貌と之に伴う人口問題の推移によって漸く現はれてくる人口理論の基礎的問題で、リューメリンに期待すべきことがらではない。

要之、第一には近代社会の当面する諸問題の根底に人口問題の存在を強く意識し当時の社会的苦悩を外なる過剰人口問題としてとりあげたこと、そして第二にはこの過剰人口問題を国民経済学的観点から把握することによって問題の近代的な分析に先鞭を附したこと、しかも第三にはそのような社会経済学的問題の根底に新しい時代の厂史的動向を観取している、ことい凡そそのような三点にリエトメルサンの「過剰人口論」の文献史的意義はつきよう。しかも右の三点のどれに重点をおくかによって彼に対する史的評價も亦相違しようし、又その社会経済学的分析を更に押しすすめ、その厂史的感覚を厂史主義的原則にまで徹底するならば彼のマルサス主義者としての立場は根本的に修正されねばならなくなるといったような関係にある。そこにまた本論稿が爾後の活潑な人口論争への出発点として繋がっている深い含蓄もあるといえようかとおもう。十九世紀末葉より廿世紀初頭に亘るドイツにおける人口学説の発展に関する調査研究の一助としても亦わが国に彼の「過剰人口論」をとりあげる所以も亦そこにあるわけで、以下その大意の自由訳的紹介は三国技官の筆になるものである。

（本多技官記）

リューメリン「過剰人口論」（要旨）

一

マルサス學説の論議は問題外としてもよいが、反マルサシヤクとも、少くとも現在独乙が過剰人口の状態にあり、將来も亦斯かる状態が随時発生する可能性のあることは疑い得ないであろう。今日の独乙には既に過剰人口が発生しているということ、そして、それは如何なる結果をもたらしているかということこそ今日の緊急問題なのである。私は現在の独乙が過剰人口の状態にあるとの確信をもち、而も、この過剰人口程独乙の現在及び將来の政治的、社会的関係に深い影響を及ぼすものはなく、且、現在の独乙を支配している一切の困窮はこの見地から観ると全くその意味を一変するものと信ずる。

先ず、過剰人口とは人口密度の如き数量的表現を以て捉え得るものではない。それは人口と經済との関係から生ずる相対的概念であって、つまり、持續的に、人口増加が國富、國民所得の増加を超えている場合、其の結果として平均國民所得が持続的に低下する場合を云う。それは重要な産業部門が競争に負いて縮少され、利潤、利得は減少し、その國土は國民を扶養するに十分な生活資料を供せず、而も輸入資金は欠乏して輸入も困難になり、従って、国富、國民所得の増加が不可能になる場合である。

而して、現在の独乙には斯かる條件が悉く妥当している。

二、

現在の独乙の人口増加率を見るに、一八八〇年に四千五百十九万四千人にして一八七五年に比し約二百四十六万の増加であり、一八七一年以降は四百十三万五千人の増加である。一八七五年から八〇年迄の年平均増加率は一・九%である。之が如何に異常な増加率であるかということは二の率で將来と過去の人口を計算して見れば明瞭である。即ち、

五〇年後七千九百万
一〇〇年後　一億三千八百万
百年前　千四百万
二百年前　四百八十万

と云うような極端な数値が算出される。

ところで、完全に耕作され尽した地方では収穫逓減の法則が支配するので収穫の増加率は逓減するから人口増加率もやがて低下するのが自然である。のみならず、耕地面積が不変である場合には、増加率よりも寧ろ絶対的な増加数を問題とせねばならぬ。特に独乙のこの九年間（一八七一年―八〇年）の四百万を越える如き大きな増加数が問題で、之はヴイッテンブルグの二倍の人口、バーデン、ヒエッセン、ロートリンゲン及ヘッセン三州以上の人口に相当する。

加之、よく自慢される如く、独乙民族の繁殖力は強く、この九年間の出生總数は約千六百万で、その中、千百万が死亡し、百万が海外へ移住しており、その残りの実増加が四百万を超しているのである。

この増加人口の行方を見るに、二万以上の都市の人口は九年間（一八七一年―一八八〇年）に於て、七一年五百一一万・七五年六百一五万、八〇年七百二三万で、四百一三万の増加人口の大半が都市に流入しており、又産業別に見るに、少くとも、三百万が商工業に流入して、従つて農業への吸収者は僅小である。

この増加人口は子供であるから消費は比較的少ないと云う者があるも、之は人口の年令構成は除々に変化するものである性質を理解せざる謬見で、四百万を超える此の増加人口の生活資料の配慮をいさゝかでも軽減するものではない。

三、

それでは右の人口増加に対応すべき国富、國民所得の増加は如何であらうか。

國民經濟全体を一個のものとして把握するためには國富とそれから生ずる國民所得を明らかにせねばならぬが、國富統計は独乙では未だ計算されたものがない。英國の例で見るに、R. G. Giffen の計算に依れば、千七百四十億マークにして、又之を佛国の例で見るに、A. Go Colle の計算に依れば千六百億マークである。この英国、佛國の例から推算して國富は國民所得の九倍乃至十倍と推定すれば、独乙はプロシヤ、ザクセンの所得税額（約五百五

十七億）から推算して全國富は千三百億マークとなる。この計算は大凡の概算に過ぎないが、この數字から人口增加に比例して國富が增加する場合年如何程增加すればよいかの計算が出來る。即ち、千三百億マークでは人口と同じく年約一〇％增加するとすれば年十三億マーク、九年間には百八十億マークの增加が必要であることになる。

次に、國民所得は（[illegible]）の計算に依れば八〇億八千五百万マークにして、一人当三一〇マークである。之より推して人口と同一割合で增加するとすれば人口一人の增加に付國民所得は三〇〇マークの增加が必要であり、九年間の四百一三万五千人の增加では一二億四千万マークの增加が必要となる。

之を實に不安定な貨幣價値に依らず物で計算すれば九年間の增加人口の消費の膨大さが明確となる。三〇年前に（[illegible]）の計算に依れば一人当りの年消費額の大約は穀物三大二ポンド、肉五一ポンド、牛乳三六〇立、羊毛三五ポンド、亜麻五マール、綿布一六マールである。之に九年間の增加人口數を乘ずると、穀物一四九六八七〇〇百ポンド、肉二一〇八八五〇百ポンド、牛乳一四八八六〇〇〇〇立、羊毛九〇〇〇〇〇ポンド、亜麻二〇六七五〇〇〇マール、綿布六百万マールとなる。

綿の外は國内で生産されるものなるも之が問題で、独乙の現状では斯かる大量の生産增加は期待されない。元來、文明國では食糧が二十五年毎に算術級數で增加するとのマルサスの假定は過大である。最近の十年間の独乙の農業統計に依れば殆んど增加を示していない。こ

の証明には十年前は輸出せざりし穀物を現在は三億マークも輸入してゐる事実を挙げれば十分である。

四

右に述べた如く、独乙の現状は穀物其他を輸入している。一般的に云つて、其の國土が国民の必要とする食糧を十分に生産し得ざるときは國民經済の発展上危機である。この危機は世界貿易の立場から有無相交換することに依り克服し得るとの見解があるが、この見解は一般論としては承認し得るも、少くとも、独乙の現状では之は不可能である。

第一に、國民は年々の所得からそれ支出を賄はねばならぬものであるが、現在の独乙は所得が不十分のため既に輸入制限を必要とする如き状態にあり、將来之が益々強化される傾向にある。更に、必需品中でも食糧と其の他のものとはその性質が異るのであり、食糧の不足する国は最も不安定な立場にあるものであり、現在の独乙はこの危機にある。更に英国の如く七つの海を支配する立場にないから一層不安定である。又、國民經済上その柱石として最も安定が望ましい農業が外国の生産事情に左右されるから不安定な産業部門となるのである。

次に、原料を輸入し製品輸出で賄へばよいとの見解は原料供給国も將来漸次工業国化し輸出が不可能となる如き不安定な立場に立つものであることを見逃すの見解に過ぎない。

要するに、文化國の眞の目標は自給自足、少くとも食糧の自給自足にある。

本来農業は耕地面積に限界があり、著しい人口收容力の増加は期待されないから加之、農業

の機械化は多数の労働者を不要たらしめている。この結果農村増加人口は都市に、商工業に流入しているが、一八七一年の調査に依ると産業別人口は商工業四〇%、農林業四八%、其他一二%である。その後九年間の増加人口四百十三万五千は最小に見積つても三百万が商工業に吸出されている。商工業人口は九年間に一八%年約二%の増加に対し、農林業其他で同期間に五、六%、年〇、〇六二%の増加に過ぎない。とはいえこの事実から商工業の発展は無限にして人口増加は歓迎すべきものであると考えるのもやはり間違である。商工業の発展にも限界はある。

即ち、第一に工業はその性質上農業以上に不安定である。即ち、食糧は人間に不可欠のものであるが、工業製品は必ずしも不可欠のもののみではない。又工業は需要、販路、競争に著しく依存している。更に分業と機械化は著しく労働力の節約を余儀なくせしめている。この工業に無限の人口吸収力を期待され得ようか。

更に、人間は消費者であると共に生産者であるから人口の増加は歓迎すべきものであるとの見解は生産には労働の外資本が必要であることを忘れたものである。資本は財産増加に依り作られ、財産は所得の増加に依り生ずるものであるから所得の増加以上の人口の増加は望ましくない。

五、

この九年間（一八七一年―一八八〇年）の人口増加が国富、国民所得の増加に劣つている関

係は遺憾ながら之を統計的に明示し難いが、次の如き事実は斯かる数量的関係にある証據と云ひうるであろう。

この九年間（一八七一年―一八七九年）に破産せる企業の数は新設された企業の数より遥かに多かつた。又企業の配当は減少し、資本は投資先を公債に求め、このため利子は下り、一般に利得が困難になつた。人口増加の収入も減少した。プロシヤ、ザクセンでは最高所得階級の数が減少した。他方、破産犯罪は殖え、監獄は満員となり、救貧院も満員の状態である。

凡ての職業部門は満員で、失業者、乞食が街頭に溢れている。この現象が過剰人口現象に非ずして如何なる現象であろうか。

之を恐慌と見る向もあるが、之が恐慌であれば、技術と局部的生活過剰であるから直ぐ再び回復する筈である。然るに八年間も継続しているも、他の国では未だ何処にも生じていない現象である。之こそ独乙現代の過剰人口に外ならない。

此処で一般に忘れられているマルサスは云う、人間の生殖力には生存資料を超えて増加せんとする不断の傾向がある。この阻止が必要である。阻止の手段は第一が禁欲であり、之がなされないと、罪悪と困窮が生ずると。この言葉の中にこそ不可解な謎の解決の鍵がある。

以上で現在の独逸が過剰人口であることが明らかとなつたとすれば次に、その原因は何であるか。

一八七一年以前の六十七年間に欧洲の人口は二億から三億二千万になり、独逸の人口も二千四百万から四千万に増加し、七一年以降も上述の如き増加を続けている。

工業の発展、国富の増加等の一般的原因は別として、此処で特記すべき原因は居住、婚姻等の自由制度にある。この自由は個人の能力を完全に発揮せしむる目的をもつもので当時全英論が之に賛成したものである。この自由制度の結果、結婚の増加、出生の増加を見ても、之は繁栄の徴候であると見ていたのであるが、此処でマルサスは起れられ、彼の警告は馬の耳に念仏であつたのである。

この結果、先ず結婚の異常な増加が現はれた。その数字は次の如くである。

年次	結婚数（人口十万ニ付）
1872	1029
〃73	1002
〃74	953
〃75	901
〃76	852
〃77	777
〃78	762
〃79	749
平均	833

結婚数は漸次逓減している。之を好ましからぬ徴候或いは自発的節制の結果と観る者があるも誤りである。この逓減は一時に結婚可能年令階級の者の数より以上に結婚がなされていた結果後で逓減せるものである。平均結婚可能最大限は年令構成上十万二千八五四にして、この八年間の平均八八三は尚最大限を超えている。七六年以降の逓下は精神的肉体的に結婚出来ざる者もあり又以前に年次の若い者が悉く結婚した結果生ずる当然の現象であつて決して自制の結果ではない。

斯かる若く多い結婚者の中には当然多くの堅率にして経済的に不安定な者の結婚、特に労働者階級のそれが含まれている。

一般にはこの結婚の増加は経済的繁栄の徴候、将来への信頼の尺度と見られているのであるか、之は又軽率の徴候、家族扶養の負担を社会へ転嫁する権利への信頼の徴候とも見られるのである。

実際、自由が常に安全燈を伴ふものであれば物事は簡単である。然し現実はしかく簡単に解決されないのである。この点で婚姻の自由を制限せざりし立法が非難さるる所きである。自由を主張する者は子女の教育、職業等の負担を社会に要求するのであるも社会は之に耐え得るであろうか。手から口への労働者階級は経済的考慮が無く、父の負担す可き子女の扶養義務を社会へ転嫁し、他方富裕、智識階級は経済的考慮から子女の制限を企すので無智な者の子孫がより多くなり之は社会にとり好ましからぬ現象である。之の故に社会の子女の扶養

義務は認む可きでなく、社会の負担に於て多くの子女を産むことを独り人の基本权となす可きではない。

元々、労賃が六人―八人の家族を扶養する程高かつた事は嘗つてなかつた。嘗格国、英国と独乙の六千マーク以上の所得者の所得総額を六千マーク以下の所得者の人数で割つた一人当所得を比較すると次の如くである。

英　國　二六〇マーク

プロシヤ　三七マーク。

子女の扶養費を直接に累進税で取立てればよいとの民主思想があるも、この結果は大企業家、資本家がなくなり、次位の階級は大象のいびきに下いやがてウーランドの言つ間もなく海岸からライン迄救貧院で充つるであろうことが実現されることになる。

七、

最後にこの過剰人口の結果を阻止すべき対策が問題になる。此処で我々は最大の社会悪の存ずるのである。

先づ、考慮さるべきはこの社会悪は尚初期の段階にあるに過ぎないということである。この九年間の異常な結婚の増加の結果は出生増加となつて現われるであろうし、

又この期間の千六百万の出生児は著く高い幼児死亡率の結果千百万に減つた。然し、学童数は一八七一年に八十八万であつたが、將来百十万―百二十万となり、之が次々に学校に満ち溢れ、更に職業を求むるのである。この事業は少しの程度ですら変え得ない。此の事業を率直に認め、耐え忍ばねばならぬのである。

国家权力は斯かる大きな社会悪に対しては弱く、それが除りうる手段は唯之をより小さい害悪に置き変えるに過ぎないのである。

その対策は、何より先ず、この過剰人口の事実を認めることである。現在はマルサスの論議が重要ではなく、我々の足下の社会悪が重要である事を認識することである。而して、佛國の人口増加の緩慢を蔑視することを止めることである。

更に進んで佛の現象を正しく理解評価することである。佛國に於ても以前に現在の独乙以上の人口増加の時期があつた。佛農民は自己の滅亡を防ぐために土地の細分に限度があり、そのための唯一の手段は子女数の制限であることを覚つたのである。この結果、佛の国富は増加し、一八七五年の貯蓄は四百億法と云はれている。加之、佛は独乙より温厚肥沃であり、その人口密度は一平方哩当七百人少たるに過ぎず、人口増加は比較的多かりし一八七五年にして一三万七千に過ぎない。佛を独乙と比較すれば、子女数が少なく益々富む富裕者と子女数多く益々窮迫する貧者との如くである。

この故に、独乙の大衆にこの事実を認識せしむる事が重要である。

次に、植民は就業者と早婚者の減少結果する点に於て過剰人口対策に有効である

第三に人口増加に何よりも責任を有するものは結婚の自由を認むる立法である。仏も同様であるが採用されてない。独逸ではこの自由が富裕、智識階級は別として、濫用されており、特に労働者階級に於て然りである。この階級の早婚の結果は労働者保護の如ゆる手段も無駄になり、階級闘争、対外戦争へと駆る事になろう。

依つて、三〇才未満の者にして結婚せんとする者は財産、地位、人物証明書に依り家族扶養可能の証明の必要を法化する事が必要である。

次に、この婚姻の制限は私生児の増加を来すであろうも、過剰人口てう社会悪と何れかより良きかの評價として、当然後者を選ぶ可きであり、このため、仏民法の「父の探求を禁止す」（La le cherche de paternité est interdite）なる原則を帝国民法に採用す可きである

盡し、父母たる可き者の共同の責任を唯女子のみに課することは自然の法律感情に反するかの如く思はれるも、ヨリよき方法がない限り女子に課することも止むを得ない。

然るに今日の大聯邦國制度は大なる社会悪に対処出来ると共に亦その任務がある。

現在の独逸に於ては帝国内の各州の人口分布は一様ではなく、過剰な所も過小な所もある。

農業人口はその生産物が工業生産物と異り常に販路をもち、且、過剰人口の影響を直接に受けるに過ぎぬという特殊な立場にある。そ故農村の過剰人口と都市の工業が受け入れなくなつた場合は過剰人口の生産を止むれば足る。

又工業に於ても今日の処は各部門が官営朝人口の危機にある訳ではない。大聯邦制度のために人口の過剰、過少の各段階が広く分散している。又支出制限も最近の労働者階級の生活程度では未だ幾分の余裕がある。これに対し帝国は一段上の立場から調節する任務がある。

以上、各方面から現在の独乙が困窮期に際会していることを観察し、之が対策として帝国の強力且賢明な統制を切に要望して止まない。尤も本論の趣旨を初めて発表した三年前には、私は政治的統一事業を一応完了した帝国の着手すべき国内的事業として斯かる任務の遂行を確信して疑わなかつたが、其の後の経験から現在の私はこのことを唯希望として語るに止めねばならぬ。

（三　國　技　官）

附録

リューメリンのマルサス批評について

はしがき

リューメリンのマルサス觀は彼の「講演及論文集」第一卷所收の一論文 Ueber die Malthus'schen Lehre 「要約表現されている。「マルサスの周知の諸命題は、個別的には、その統計學的並に心理學的基礎づけの中に欠陥をもつているが、全体的には覆し難く且つ最も自明古眞理である」という冒頭の一句は彼のマルサス批評の根本態度を遺憾なく示している。彼はまず統計學的並に心理學的な事實に關するマルサスの個別的欠陥を指摘し、マルサス説の部分的な補完と修正を要求しているが、全體としてその眞理性を自明のことがらとし、それを新しい現在の統計的資料によつて實証しようと試みている。以下その緒序を述べて論旨の大要を紹介することとする。但し論述上の分節は紹介者の適宜に試みたものである。

一、統計學的欠陥

全体としては覆し難く且つ最も自明の眞理であるマルサス學説中特に補正すべき個々の欠陥の一としてリューメリンの指摘するものは統計學的根據に関するもので、その例證として一婚姻当りの出産児数がわづかに四人であるとしても人口は二十五年にして倍加することになるというマルサスの命題が取り上げられている。蓋し全人口中被扶養者令にあるものは幾か

に三分の一強に過ぎないからそんなに早く人口は倍加することにならないわけであり、また反之すべての若い夫婦に四人づゝ子供が生まれるとすると両親はすぐ死んで了うわけではないから人口は倍加どころか六倍に増加することになる。就中にせよ、如何なる人口増加を以て可能なる乃至は正常なる増加と見做すべきやの問題については人口の年令構成や家族構成を明らかにせねばならず、マルサス当時の統計学の手段を以てしては充分に養れることが出来なかつたというのがリューメリンのいうマルサス学説中の統計学的欠陥である。

二、心理学的欠陥

第二の、更に本質的な欠陥は学説の心理学的基礎づけに関するもので、マルサスは性本能と栄養状況或は生活資料の限界という二つの要因をしか取り上げていないが、併し事象は更に複雑な性質のものでかけねばならないことをリューメリンは指摘する。特に人間の本性として増殖本能を語り乃至は性本能という言葉をかゝる意味で使用することは、リューメリンによれば、解つたようで実は解らぬ有り勝ちの誤謬であり、或は少くとも一つの婉曲法的表現に過ぎないゝ正確にいえば心理学は種を増殖しようとする本能などというものを知らない。知つているのは性愛の本能と子供愛の本能という二つの違つた本能だけで、たゞこの二要素の協働した機能がさような結果を生ずるだけである。性愛の本能には特に理想的な動機が結びつくことができるが、併し根本においては感性的刺戟自体を目的としたもので其の全面的な結果を自ら顧慮するものではない。反之、子供愛の本能とは生まれた子供を自分自身の身体

の一部分と考えその保全と幸福とへの配慮を自分自身の利害として感ずる親、特に母親の性来の性向をいう。しかし子供が欲しいという欲望はこの子供愛の本能の直接の現われではなく、かゝる本能の潜在的な働きに伴う想像的な感情に更に他の色々の動機が協働せねばならぬ。例えば可死的な自己を補完し、存在の空虚に内容と目標とを與えようとする願望、或は凡ての利己心の根底に潜んでいるところの愛と愛されようとする願望などが協働せねばならぬ。

子供を持ちたいという願望と性慾本能とは心理学的に全く別のもので、実際的にも亦両者の一致する場合は極めて稀れである。そして両者が別のものであることこそ言わば自然の好果とも称すべきで、それは利己的な欲情に意慾せられざる結果を結びつけ、この結果に結合せる苦痛の負担に対しては又生まれたるものへの愛という第二の本能によつて之を緩和し、そうして生まれたものをその死滅から防護することにある。

が事柔をそのように分析してみると、之らの本能が無制限に発動し難いという事情も亦明らかになる。マルサスの考えたように保養と食糧だけの問題ではない。それは社会的地位を向上させ、経済的状況を改善しようとする要求などと衝突し又妥協せねばならぬ。子供愛の本能きれ少しの子孫をよりよく育て、より多くの遺産を残そうとする考えによつて自ら自分自身を制限せねばならぬ。マルサスは人口過剰への防げとして道徳的抑制と罪悪との二種を説いているが「道徳的」という概念には範囲が明瞭でなく、実際には徳と罪悪との間に道徳的でも悪けれ

単純的でない。尨大な諸動機の世界があり、他の精神能力に対する抵抗力を形成している。生活福祉を向上するために子供数を制限することは多産のために多くの子供の生命を犠牲している場合と較べて果して乳を道徳的と考うべきであろうか。それはそのような評價は無関係な動機の世界に属する。しかも、リュートメリンによれば、人類社会の進歩と向上はかような動機を主動力として進行して来たものである。といふのは、果してマルサスのいう上うに人口増加が唯二食糧にのみ制約されており、人口増殖に関係する諸本能は不断にこの生活資料の限界を乗り越えようとする力と傾向とをもっていて他の諸動機は単にこの力を右の限界内に押し止めるだけの働きしかないものとすると、人類社会はその最初の生活段階に立ち止つて、その経済生活に於いても又その德性に於いても最早何等の進歩も不可能であつたことになるからである。

三、マルサス的命題の修正

右の趣旨によりリュートメリンは、経済的手段の向上は必ず之に相応する人口増加によって伴われるというマルサスの命題に対して一見之と正反対の法則の存在することを強調する。曰く、凡ての道德的に涵冶された國民は其の收入を其の人間数よりも速かに増加させ、且つ人間の増加を経済的手段の増加よりもいよ〳〵遅か後方に立ち止まらしめる傾向をもつと。而かもリュートメリンによれば、之はマルクス命題の反駁でもなければ否定でもない。寧ろその理解を鋭くしたべけだという。といふのはそれは單にマルサスが枚挙しつくさなかつた

自然的妨げ、又道徳的に無記なる反対作用を考慮に入れたゞけで、国民収入の増加と国民人口の増加はやはり相関々係をなしてきり、且つ後者は前者に従属していることにふるがらである。たゞ国民の収入は何よりも先づ国民の活動力に依存し、第二義的にのみ自然的諸條件の恩澤に依存するものであるから、国民人口の増加も亦各国民の道徳的及び知性的特性に依存することになる。従つて勇敢にして活動的且つ知性的なる国民のみ其の人口を顕著かつ継続的に増大させることになるわけであるが、併しこの収入と人口との相互的増大には種々の仕方が可能であり、之に対する文化国民の態度にも種々の相異の生ずべきことは佛蘭西と英国とを比較するだけでも充分である。植民地諸國は又全く例外的な特殊的條件の下に立つている。

要之、リューメリンはマルサスの取り上げなかつた新しい厂史社会的並に文化的な妨げの働きを附け加へることによつてマルサスの人口法則とは全く正反対の傾向の合時に存在せねばならぬことを主張し強調する。とはいえ、この修正は何處までも修正であつて、リューメリン自身は之をマルサス的命題のより洗練せられたる解釈に過ぎぬものといつており、マルサス主義者たる立場を堅持して譲らない。そして彼をしてマルサス主義者たらしむるものは、外でもなく、感じて人口増殖力が所謂意味に於いて過大であり、之を何らかの仕方に於いて抑制することに人類社会の本質的な課題を見るその態度の中にあるといえよう。

四、自然的人口増加速度の統計的推定

」とはいえ、リューメリンの考える人口過大増殖力の思想にはマルサスにみるような自然主義的な迫力はない。リューメリンの考える過大増殖力とは、統計的に実證せられるところの現存の事実である。人口増殖の生理学的可能性の如きは少しもリューメリンの関心をそそらぬ。蓋しかかる生理学的可能性は種々の動機によって心理学的に制限されており、そして女性を之を出産機械と見做すべきものではないのだから。是故にリューメリンの統計的に實證しようとする自然的かつ正常的なる人口増加なるものは、少くとも欧州の文化国民に関するものであって、統計的材料の上からいっても亦ここに於いてのみ不充分ながらその必要が充たされるわけである。

、先づ女子の妊孕年令期間については早きは一七才より晩きは四八才乃至五〇才までが考慮にのぼるけれども、全一人がこの全期間に亘って妊孕力があるわけではない。そこでリューメリンはロッシャーに倣い妊孕年令期間を一九才乃至四一才の二十二ケ年として計算する。そうすると、中欧の人口年令構成より妊孕年令女子の比率は人口千に付き一六五の割合となる。なおこの一六五人中一五人は不妊症であるとすると、残りの一五〇の人が人口増加に貢献し得るものとなる。そこで一女子がその妊孕年令期間中に出産する子供数を三人とすると一年の出産率は人口千に付き、（[illegible]）。仝様に四人の場合は二七、二；五人の場合は三四、等となる。他方、死亡率は人口千に付二〇を割って最善の状態にあるも

のとし、出産率の増大につれて当然に上昇しゆくものとすると、大体左の如き結果を得ることになる。

有配偶女子の出産児数	出産率（人口千に付）	死亡率（仝上）	自然増加率（仝上）	人口倍加期間（年）
三	二〇	二〇	〇	〇
四	二七	二二	五	一三六
五	三四	二四	一〇	六九・六
六	四一	二六	一五	四六・三
七	四八	二八	二〇	三五

一夫婦が四児を挙げることによつて人口は二十五年にして倍加するというマルサスの計算の誤りは右表によつても明らかとなるが、最近の五ヵ年間の欧洲諸国民の実際の人口増加率は年平均一・五%を超えたものはなく、而かも経済的並に社会的状況は異常な好條件下にある。そして人口増加をかくも妨げている諸要因中の最大なるものこそ、その収入をその人数よりも急速に増加させようという凡ての教化せる国民に共通な願望に外ならぬとリーメリンはいう。

而かもこうの事実は、リューメリンによれば、一見マルサスの諸命題を反駁するかの如く

に見えるけれども、実は単に之を補完し部分的に修正するだけで、其の核心と本質とに抵觸するものではなく、寧ろそれを一層強く解明する所以のものである。即ち最強力な自然本能は人口を無際限に増殖に駆り立てゝおり、従つて地の諸力による不断の妨げと抑制とが必要となる、そしてこの衝動と其の妨止とそれての歴史的発展の根本動力であるという根本の主張をそれは唯より洗練された形において確認するものに外ならないのである。マルサスが人口の倍加期間をあまり短く計算したことは此の主張の本質的核心にとつては全くどうでもよいことなのである。

五、結論

要之、リューメリンによれば、個々の文献にも拘らずマルサス的命題の核心的主張は飽くまでも覆し難い自明の真理である。或はその個々の文献を補正し、それをより洗練されたる形において解明することによつてこそ其の核心的主張はいよいよその真実さを明らかにする。

そういふ立場からリューメリンは最後に、主観的恣意的且つ正常的な人口増加率にも及ばない現在の欧洲文明諸国民の増加率を以つてもてこそ、更には人口が殆んど静止に近い年平均一%という増加率を以つてしてみても、現在の欧洲人口は一世紀乃至二世紀後に如何に極端な人口に増大せねばならないかということを計算してみせる。その数字をこゝに再録する

ことは欧洲の文明諸国民が出産減退に伴う停止原理減退人口への道を歩んでいる今日一種の時代錯誤のそしりを免かれることができまい。又彼のような統計的数字の操作はもとしマルサスの人口論を証明するものでもなく、又その人口原理を代位し得るものでもないばかりかまたリカードのマルサス批評がもつ古典的意義は能くまでマルサス信奉者として行はれたその批評的補完を修正とか、それにも拘らず指向している新しい原理的省察への暗示の中にこそあるといえようッ統計的数字の冗漫なる駆使は実は原理の動揺を粉飾する代用品に外ならぬといえないであろうか。

（木多枝宮）